キリスト教と近代的知　「近代／ポスト近代とキリスト教」研究会
2010年3月　13～14頁

特集

特集：キリスト教思想の新しい可能性
―「宗教と科学」の問題圏より―

はじめに

芦名　定道

本論文集「キリスト教と近代的知」では、「特集」企画として、日本宗教学会第 68 回学術大会（京都大学）のパネル「キリスト教思想の新しい可能性―『宗教と科学』の問題圏より―」（2009 年 9 月 13 日午後・第 4 部会）におけるパネリストの研究発表を収録することになった。それは、この特集の前に、「本論文集の序に代えて」という副題をつけて掲載された論文「キリスト教と近代的知」で論じたように、「キリスト教と自然科学」という問題が、「キリスト教と近代的知」の中心に位置しているとの考えに従ったものである。この理由と合わせて、この機会に、当パネルの企画が、現代キリスト教思想研究会のこれまでの共同研究に遡ることについても一言指摘しておきたい。

本研究論文集は、「近代/ポスト近代とキリスト教」研究会の研究報告書（2009 年度）であるが、当研究会は、他のいくつかの研究会と共に、「現代キリスト教思想研究会」を構成している。この「現代キリスト教思想研究会」の発足当初から共同研究の場として活動してきたのが、「宗教と科学」研究会（http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/science/index.html）である（現在は休会中）。こうした経緯からもわかるように、現代キリスト教思想研究会は、その発足以来、常に「宗教と科学」「キリスト教と自然科学」という研究テーマを自覚的に取り上げつつ、活動してきた。その意味で、本論文集において、今回の特集を組むことは、「宗教と科学」研究会の活動の一端を受け継ぐ当研究会にとって、きわめて自然なことと言わねばならない。

この特集に収録するにあたり、パネリストの方々には、当日の研究発表を踏まえた論文執筆をお願いしたが、実際の研究発表に比較的即した内容のものから、研究発表を発展させた内容のものまで、貴重な論考を収録することができた。また、当日コメンテータを務められた今井尚生氏にも、ご自身の考えを論文として執筆いただいた。

以下、本パネルのコーディネータの立場から、パネルの意図と概要を説明しておきたい（ほぼ同じ内容の文章が、『宗教研究』学術大会特集号、第 83 巻 363-4、2010 年、に収録されている）。

キリスト教思想は、ポスト近代の思想的状況下において、多様な動向を示している。その中で、とくに顕著なものの一つが、「キリスト教と自然科学」をめぐる議論であり、とくに欧米のキリスト教研究において言えば、マクグラス、クレイトン、カブ、マクフェイグなど英語圏の神学者からパネンベルク、モルトマンらのドイツ語圏の神学者まで、その広がりはキリスト教思想の広範な領域に及んでいる。これは、キリスト教思想において、

伝統的に「自然神学」と呼ばれる思想領域に関わる問題であるが、伝統的で古典的な自然神学を踏まえつつも、現在のポスト近代の知的状況に即した自然神学の再構築が世界的広がりにおいて求められていることを意味している。実際、19 世紀から 21 世紀にかけて、自然神学の問題領域は、天文学や物理学から、生命科学（進化論を含む）、心理学、そして脳神経科学へと大きく拡大され、その学的基礎の再検討なしには、今後のキリスト教思想の積極的な展開は期待できない。また、こうしたキリスト教思想が直面しつつある問題状況（科学技術時代の宗教という事態）は、21 世紀の宗教思想研究全般にとっても、共有可能であると同時に避けて通れないものと思われる。

本パネルは、以上の問題状況を前提に企画された。各パネリストにはそれぞれ独自の視点から発表いただいたが、パネル全体としては、日本におけるキリスト教思想研究の新たな可能性を展望することが目指された。まず濱崎雅孝氏には、「科学と神学の対話」をめぐる現代キリスト教神学の問題状況を確認した上でパネル全体の議論の方向付けをお願いし、続く落合仁司氏には、キリスト教思想と科学の関わりを論じる際に、その基礎となる「数学」の役割について議論いただいた。こうした理論的基礎論に対して、金承哲氏には、生命科学（とくにクローン技術など）の進展がキリスト教神学にいかなる問いを突きつけているのか、杉岡良彦氏には、現代医学の問題状況で、宗教の問題を論じる意義はどこにあるのかといった視点から発表いただき、「宗教と科学」という問題圏が有する実践的な射程の明確化が試みられた。最後にコメンテータの今井尚生氏には、個々の論点についてのコメントとともに、キリスト教神学と現代物理学という専門領域から、発表全体に対して論評いただいた。

以上の発表とコメント、そしてフロアーとの質疑応答を通じて、「宗教と科学」の問題圏から見たキリスト教思想の新しい可能性について包括的かつ具体的な議論がなされるとともに、次のような問題点や今後の課題が明らかになった。

まず、キリスト教思想の側に現代科学との対話を求めることへの動機付けが存在することは理解できるとしても、科学の側において、宗教・神学と対話する意義はどこに認められるのかについては、論点を整理し問題の所在が明らかにされねばならない。とくに現代日本の学的状況下で、宗教との関わりを積極的に考えている科学者や医者は依然少数派であり、むしろ、科学的説明に問題を還元する傾向（事柄の説明や理解において宗教が何らかの役割を果たすことへの懐疑論・否定論）が顕著である。このことは、日本において「宗教と科学」の関係性が問題として共有され難い原因の一端をなしている。しかし同時に、こうした近現代日本の知的状況がそれ自体問題的であることも指摘されねばならない。また、神、人間、自然といった伝統的な階層的区分・境界線が揺らいでいる現代の状況については、それを世俗化過程の中に位置づけ、そこから伝統的なキリスト教神学の変革を論じることも可能であるが、諸存在を分割・秩序化する空間的階層的な境界線と合わせて主観客観という認識の枠組み自体も再考を要するであろう。さらに、現代数学が切り開いた議論の地平――神について語る隠喩としての数学は従来矛盾として処理されてきた問題を新たに理論的に論じることを可能にしている――も、現代の宗教思想との接点を明確化するとともに、再度キリスト教思想史の伝統的議論の中に位置づけられる必要がある。

あしな・さだみち（京都大学大学院文学研究科・教授）